

追悼 奥村容子さん

二〇〇五年四月二五日にJR西日本福知山線で発生した列車脱線事故は、百名を超える犠牲者を出す大惨事となりました。そして、その事故を起こした列車には、本学史学科（西洋史コース）に四回生として在籍していた奥村容子さんが乗り合わせ、犠牲者のひとりとなってしまわれたのです。

京都女子大学史学会では、奥村さんの逝去を悼んで、『史窓』誌上にささやかながら追悼録を編むこととし、奥村さんが所属していたゼミの担当者である新田一郎教授に加えて、三名の学生諸姉に奥村さんを想う気持ちを綴っていただきました。なお、左に掲げた奥村さんの写真は、事故の三日前に新田ゼミで撮影されたものです。

（『史窓』編集委員会）

奥村容子さんを偲ぶ

新田 一郎

四月八日(金) 本日は私の研究室で行なう四回生対象の「演習」の最初の日である。奥村さん、最も早く到着、一言、挨拶する。私「久しぶりですね。三回生の時に比べ随分と成長されたようですね」。奥村さん「とんでもございません」。一知的・精神的側面を前提とした挨拶であったが、打てば響く形で同じ次元での応答があったことが印象的であった。

四月二二日(金) 今日から研究発表がなされる。最初の発表者は名簿順なので奥村さんである。エジプト新王国トトメス三世の対外政策に関するものであったが研究の蓄積を感じさせるまとまった発表であった。今後は洋書による研究も併行して行なうよう指示した。

四月二五日(月) 午後一時半頃、喫茶に行ったA校舎地下食堂のテレビで福知山線の列車脱線事故を知る。その少しあと学生生活センターから電話があった。奥村さんの消息について御両親から大学に聞いた。私は「月曜日は受講科目は無い筈なので大学には来ないので」と返事した。このあと奥村さんのことで気になっていたが、彼女の家が兵庫県ということしか知らず、従って阪急電車通学の可能性もあると考え落ち着こうとした。帰宅後も同じ考えを保持していた。

しかし午後九時半、大学から電話があり、奥村さんの死亡が確認されたとの知らせをうける。語るべき言葉を知らず。

四月二六日(火) いつもの如く早朝出校。奥村さんが私のゼミ学生かつ私が四回生のアドヴァイザーということもあり昼頃から情報収集のため新聞記者が多数来室。このような事には極めて苦手であったが対応の義務ありと考え、広報係長田中氏の同席の下でインタビューに応ずる。私の手元には幸い大学進路・就職センターからの依頼で調査した自己評価票のコピーがあったのでそれを中心とし、それに演習の発表内容、受講態度を加えて話をした。まじめで控え目、だがしんの強い努力型の学生というのが私の奥村像である。この間のことは二六日のK紙夕刊、二七日のY紙朝刊がよく記載してくれていた。

四月二七日(水) 夕刻六時からの奥村さんの通夜に参加するため古賀教授、新田ゼミのゼミ長岸田さんを含む約三十名余の史学科学生と共に三田市に赴く。あの時、突如生じたアクシデントで娘さんを奪われた御遺族の無念さを思いお慰めする言葉も見出しえない。

四月二八日(木) 昼、大学内で持たれた追悼式に参加。翌日のK新聞によると学生・教職員約二八〇名が参集したとのこと。またこの日、三田市で持たれた奥村さんの追悼式には史学科主任松井教授を始め大学関係者・学生が参加している。三時すぎゼミ学生の意見を聞きたいというK新聞社の要請を容れ、ゼミ学生水本さんに来室を願った。「手を抜かない学業面のまじめさ・他者に向けるさりげない優しさが印象的でした」(二九日、K新聞)というのが水本さんの奥村像であった。

五月九日(月) 奥村さんの御両親が望月学生生活センター課長と共に

に来室。私の研究室を含め奥村さんが生前受講したJ校舎の教室を一つつまわられた。御両親のお気持を思い多くを語ることを控えた。

六月四日(土)ゼミの学生と共に三田市の奥村さん宅を訪れ学長から托された生花を霊前にお供えし焼香する。ここで彼女が阪神タイガースファンであったことを初めて知る。またその折り二階の彼女の部屋に学生と共に案内された。私は入室は遠慮し入口に立っていたので部屋の本棚の書物の内容を確認しえなかったが、ある程度の割合いで漫画本もあることがわかり彼女の知られざる部分の一端を垣間見たような気がした。

六月二七日(月)午後一時から奥村さんの大谷廟への納骨式が行なわれた。納骨に先立ちA校舎五階の礼拝堂で音楽葬が行なわれた。六千数百名に及ぶ大学在籍者の中で只一人の犠牲者となった奥村さんの霊はこれで安住の場を見出したと確信した。「若くして亡くなった人は永遠に若く美しい」の言葉を心の中でつぶやきつつ御遺族、大学職員の方々、五名の学生と共に納骨式の間をあとにした。……二日後の二九日(水)、奥村さんの御両親からの御礼状を大学を介していただいた。その文面の中で奥村さんに古書店探訪の趣味があることを知り新たな親近感をもった。そう言えば卒論に関する研究書について彼女から相談を受けたことはこれまでなかった。本の探求も研究の一環であるので、この点でも彼女の研究態度は極めて良好ということになる。ただ彼女の外国語の読解力を知る機会を持てなかったことは残念である。

九月二五日(日)今日は合同慰霊祭の日である。各々の参列者集団間に横の繋がりが無い慰霊祭ということ承知の上での参加であっ

た。しかし私は我慢するとしても、亡き奥村さん、そして参列した九名の学生さんの心の内を思い私の気持は複雑であった。

終りに私の研究室にはゼミ生竹村さんの手になる全員の顔写真を巧みに配置し記念風に作成された額が置かれている。写真は顔と名前の再確認のため撮らせて貰ったもので撮影日は四月二二日、撮影者は複数の学生さんである。表情が自然で和らいでいるのはその為と思われる。この額の完成は五月の連休明けの上旬であったと思う。以後この額から見おろす奥村さんを前に順次、発表が行なわれた。本日(十一月十八日)も三名の学生が発表を行った。発表者を含む全員の思いは多分次の如きものであったであろう。「出来ることなら一緒に卒論を書きあげ、卒業を共にしたかった。若しそうなら、どれだけ幸いであったであろうか……」。御冥福を心からお祈り申しあげつつ。

合掌

十一月十八日夜

容子さんの思い出

増田友紀

私が容子さんの死を知ったのは四月二五日の夜、テレビの脱線事故死亡者一覧を見た時です。彼女は数日前にゼミでの発表を終えたばかりで、実質それが彼女との最後の別れになってしまいました。その時の悪夢に突き落とされたような衝撃は、私を含め容子さんと関わりを

窓 築いてきた多くの人々に共通するものだったと思います。私が容子さんと過ごした時間は決して長くはありませんでしたが、覚えていることを記しておきたいと思っています。

彼女は根っからの歴史好きで、特に古代エジプト史には目がなく、私は神々の系譜やアメンホテップの話をよく聞かされました。歴史に関しては様々なジャンルの本を読み、雑学的に多くの知識を吸収していました。漫画も大好きで毎週のように友達と何冊も貸し借りして、ましたし、忙しいスケジュールの合間を縫ってピアノの練習を重ね、コンサートにも通い、三回生の頃からはオペラ音楽にも興味を持っていました。忙しいスケジュールに追われても課題はすべて丁寧に調べていましたし、朝は一番に教室に入っていました。

事故の後、お父様から彼女が毎週図書館に通っていたことをお聞きしましたが、確かに彼女はとも勉強熱心で、授業に欠席することはほとんどありませんでした。ただ時々、「ダイヤの乱れで遅刻しそう」というメールを貰うことがあり、今思えば事故の予兆が既に現れていたのかもしれない。亡くなる直前は金融業界を目指して就職活動をしていたようですが、本に囲まれて過ごす書店の仕事にも興味があると言っていました。ご両親からは、彼女がお父様ととも仲がよく、同窓会にも一緒に参加されたこと、電子機器の配線をすぐ覚えてしまったことなど、私達がついに知る機会のなかった容子さんの様々な面についてお話を伺うことができました。

総じて、彼女は常に文化的なことに強い興味を持ち、自分のスタイルを持っていたと思います。話題も広かったのでいつ会っても会話が途切れることはありませんでした。長い髪をきちんとまとめ、いつも

スカートをはいて地味でかっちりした服装を守り、視線を落として早足で歩くのが彼女の癖で、遠くからでもすぐ見分けがつかしました。その姿は今も脳裏に張り付いたままです。

事故の後、発達教育学部の土田先生から容子さんの遺灰を混ぜたオカリナを作り、彼女が行きたいと話していたエジプトで「アメイジング・グレイス」をぜひ演奏したいというご提案を頂き、私達ゼミ生はご両親と共に給付けに参加しました。そのオカリナの一つは今エジプトに眠っています。

容子さんの遺骨は今大谷廟に納められていますが、事故のほんの数日前まで隣にいた彼女がまるで煙のように消えてしまい、もう二度と声も聞くことができないという事実には私はいまだに呆然としたままです。事故から七ヶ月過ぎた今、私が一番後悔しているのは、なぜ彼女ともっと話しておかなかったのかということです。今でも大学に来ると、いつでも彼女に会えるのではないかと気がしてなりません。今生きていれば、彼女はどんな話を聞かせてくれたでしょうか。

現代の日本において電車を利用しない人はいません。容子さんは史上最悪の鉄道事故に巻き込まれた大勢の内の一人でしたが、事故に遭遇する可能性は万人に平等に存在したと言っても過言ではありません。今回の惨事は当の運転手の責任やJRの企業体質についての批判を招くばかりでなく、安全、防災についての認識を一変させる結果になりました。気付くように気付かないのがこの分野なのかもしれません。よりきめ細かく正確な、慎重を期した安全対策が採られることを切に願ってやみません。

奥村さんを偲んで

村井 愛

私は奥村さんと親しい関係ではありませんでしたが、学芸員資格課程において今年度の夏に彼女と同じ博物館で館務実習を行う予定でしたし、彼女の優しい笑顔が大好きでしたので、追悼文を書かせていただきます。

私は奥村さんと話した事はありませんでしたが、授業中に配布プリントを彼女から受け取った事が何度かありました。奥村さんは、離れた席まで嫌な顔一つせず丁寧にプリントを持ってきてくれる人でした。私が受け取る時に「ありがとうございます」と言うと、いつも奥村さんにはにっこり笑って軽く会釈をしてくれました。わざわざ離れた席まで丁寧にプリントを持ってきてくれるだけでなく、親しい関係はない私に対してこんなにも優しく温かい笑顔を見せてくれて、なんて素敵なお人だろう……と思います、彼女からプリントを受け取る時はいつも清々しい気持ちでいっぱいになりました。私は、彼女のように誰に対しても気遣いができて優しい笑顔向けられる人になりたい、と何度も思いました。

四月二三日（土）の博物館実習Ⅰの授業の時、私は奥村さんと同じ博物館で館務実習を行う事が決定したと知り、彼女の様な勤勉で素敵な人と一緒に実習ができる事をとてもうれしく思いました。しかしそ

の二日後、事故は起きました。ただ信じられず悔しくて堪りませんでした。奥村さんがするはずだった博物館館務実習は八月に行われましたが、その際、私の隣には常に彼女がいた気がします。彼女の笑顔は私の中で決して消えません。私は、人の笑顔が持つ温かさを奥村さんの笑顔から教えてもらいました。いつか天国で奥村さんに会う日まで、笑顔を決して絶やさず、奥村さんの分まで一生懸命に強く生きていこうと思います。

（本学史学科 四回生）

悲しみの中から学んだこと

林 桃子

事故当日、私は朝早くから大学に来ていて、三限の授業のはじめに先生のお話から事故があったことを知りました。しかしその時はまさかあのような大惨事になっているとは思ってもよらず、夜に帰宅すると、新聞にはほぼ全面で現場の写真や記事が掲載されており、テレビはどのチャンネルを回しても事故のことを伝えていました。私は画面に映るその光景を呆然と眺めていました。そして深夜になり、友人から「京女の人々が亡くなった」という連絡を受けて、大変悲しいことに

窓
そこで初めて同じ西洋史専攻である奥村容子先輩のことを知ったので
す。

史
私自身、事故を起こした同じ電車に乗って大阪方面に遊びに行くこ
とがよくあります。しかしながら、いつもと同じ様に電車に乗ってい
る時にあんな事故が起こるなんて、誰が考えるでしょうか。本当に、
突然の出来事にテレビを見ながら新聞を読みながら涙が溢れてしまし
た。

追悼式や納骨の前のお別れ会に参加しましたが、たくさんの方が奥
村先輩のことを思い泣いていました。こんなにたくさんの人に親しま
れ愛されていた奥村先輩は、やはりこんなに早くに亡くなってはいけ
ない人だったように思います。特にご家族の方々の苦しみや悲しみは
伝えても伝えきれないことだと思いますが、追悼式やお別れ会、ご両
親が大学宛に送って下さったお手紙では、逆に力強く温かいお言葉が
溢れていて、私達が元気づけられたぐらいでした。

また奥村先輩は大変な努力家で、いつも授業や研究に一生懸命取り
組まれていたと聞きました。私も奥村先輩を見習って、残り少なくな
った大学生活を、一日一日大切にしていきたいと思えます。
心からのご冥福をお祈りします。

(本学史学科 三回生)